

不利益の本質

楽じゃないから 楽しいのだ

川上浩司 京都先端科学大学工学部教授

travelとtroubleは発音も綴りも似ている。もしかして語源が同じかもしれないという仮説を思いついた人は私だけではないだろう。不利益、すなわち「不便だからこそ得られる益」を追求していると、この仮説を支持することがたくさんある。

出張する時、大学ではバックツアーの利用は禁止されていた（いまは解禁された大学もあると聞く）。旅程がバッチリで料金も格安のバックがあっても利用してはいけない。航空券も宿泊先も自分で手配する。そうなるトラブルはつきものだ。イタリア南部の街で国際会議に参加した。小さな街が大きな国際会議を誘致したのだから、街中のホテルは満室。なんとなく怪しげな宿しか空いていない。出国のために関西空港に向かうタクシーの中で宿泊予約していた宿からメールが届いた。「クレジットカードから引き落としができない。別のカードの番号を教えろ」と。

そういう情報を個別の宿に教えたくないから信用できるホテル予約サイトを利用している。そのカードはそのサイトに登録して、いままで何度も問題なく利用している。ここでカード番号を怪しげな宿にメールするのは危険だ。そこで「現地でカード払いする」と返した。すると「じゃあ、キャンセルね」とメールが来た。出国直前だ。いまさら別の宿を検索してもその街に空きはない。こうなれば、その宿に出向いて直接交渉すればどうにかなるだろうと、その時は気楽に思っていた。まさか、その宿が存在しないとは夢にも思わず。

初めての異国の街の初日はネット検索しても宿はなく、荷物を引きずりながら街中の宿を訪ねた。古びた宿で空室をやっと見つけた時の安堵をいまも鮮明に覚えている。やっとありついた夕飯は宿の1階にあるピザ屋にした。メニューはピザだけ、店には店主とその友人らしきおじさんだけだ。ピザ1枚とワイン1本を注文した。私がワインを口にすると、おじさんが「どうだ、この州特産のワインは？」と自慢げだ。現地なまりのイタリア語でもなんとなく伝わってきた。

英語で「うまい」と返すと、おじさんは「そうだろう」というジェスチャーをした。どうもこいつはイタリア語ができないとわかったようだ。その後の私はイタリア版孤独のグルメを楽しんだ。ピザ1枚とワイン1本だけの夕飯。「これがいんだよ」とつぶやいた。

旅を感じるには

国際会議で聞いた講演はまったく覚えていない。このトラブルのおかげで元は出張だったのがプチトラベルになった。覚えているのは宿が見つからないショック、空室を見つけた時の安堵、そして初日の孤独のグルメである。ちなみにその街で数日過ごすうちに最初の怪しげな宿を発見した。京都になぞらえると烏丸通りホテルのような大きな通りの名前を冠している。そして、その通りに面したアパートの入り口階段に設置された郵便受けの1つにそのホ

テルの名前が小さく書いてあった。つまりアパートの1室だった。

仕事では出張手配は自分ですが、プライベートの家族旅行では楽しようとバックツアーに参加した。すべてスムーズに事が運び、便利なツアーバスに乗ってたくさんの名所を効率的に巡った。ところがその旅の思い出はほとんどない。「へえ、北京のこんな近くにも万里の長城があるんだ」と思ったことは記憶している。ここでtravelとtroubleの語源仮説を思い出した。

トラブルがあったイタリア出張は思い出が満載で「旅」という感じがした。一方でトラブルなく過ごした数日間の北京は思い出が希薄だ。ということは、旅(travel)を感じるにはtroubleが不可欠ではないか。これはもう、「語源が同じ仮説」は正しいに違いない。ただ、調べてみてもどうにも確証はない。つまり私の思い込みに過ぎない可能性が高いが、なんとなく旅に私たちが求めることは何かを示唆しているような気がする。

不便が人を引きつける

トラブル発生というのは不便なことだ。ただ、だからこそ思い出深いという益が得られた。このような不便だからこそ得られる益を「不便益」と名付け、不便益をユーザーに与えるプロダクトやサービスを「不便益事例」と称してコレクションしている。もちろん不便益は旅に限らずいろいろ見つかる。中には後付け的に私が勝手に不便益とする事例もあれば、前付け的とも言おうかデザイン段階からあえて不便を導入する事例もある。

例えば京都嵐山にある旅館は嵐山と保津川に挟まれて陸路ではアクセスしにくい不便な場所に建ち、客は船に乗って渡らねばならない。しかしこの不便がプチ秘境や秘湯のイメージを作り、人を引きつける。JALの「どこかにマイル」やビーチの「旅くじ」も私が勝手に不便益認定したサービスだ。行き先がわからない航空券を買うのに客が行列を作る。一般に情報が不足しているのは不便なはず。それなのに客はそのような旅に出たい。



左折オンリーツアーの参加募集ページ。京都の街を右折することなく歩いてみる

このようなすでに存在する不便事例をコレクションするだけでなく、いままでにない新たな不便益プロダクトや不便益サービスを編み出すこともある。企業や団体の研修として、大学の演習として、よくデザインワークを実施する。出されたアイデアに旅に関連するものが少なからずある。

例えば「左折オンリーツアー」。これは京都のまち歩きツアーをテーマにした時に出てきたアイデアだ。京都の碁盤目状の街路を右折することなく目的地まで歩いてゆく。右折の代わりに直進+左折3回した時に旅行ガイドには載っていない小道に迷い込み、古い街ならではの発見をする。想像するだけで楽しそう。他には「るるぶ創刊号の旅」。これも京都のまち歩きをテーマにしたワークで出た。るるぶ創刊号は京都だそう。それを片手に40年近く前の情報を頼りにまち歩きする。一般に情報が間違っていると不足しているというのは不便な事態だが、逆に楽しめそう。

「不便」と「楽」が相反するということは皆が承知してくれるだろう。旅に出ないことが一番の楽なのに人は旅に出る。出張のような何か特別な目的がある場合は例外としよう。旅に出るのは楽ではないことをあえて楽しもうということではないか。そして「楽」の反対に「不便」がある。そうすると旅に出るのは不便益を探しに出ることといえないか。最も便利な移動ツール「どこでもドア」が開発されたとしよう。どこでもドアで行く超便利な旅を想像してみた。味気ない。



Profile

かわかみ・ひろし ● 1964年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修了。京都大学助教授、同特定教授などを経て、京都先端科学大学工学部教授。不便益の研究で学会論文賞や出版賞多数。著書に『不便益という発想』など多数。